

MONTHLY

世界の視点で情報を発信する総合誌

2016

4

APRIL

KōRON

発行・株式会社財界通信社 平成28年4月1日発行 毎月1回1号発行 第49巻4号 昭和47年11月10日第三種郵便物認可

創刊50周年記念シンポジウム
このままでいいのか 日本
さあ どうする あなたは

月刊公論



長尾和宏
(ながお かずひろ)
医療法人社団裕和会理事長、
長尾クリニック院長

1984年 東京医科大学卒業、大阪大学
第二内科入局、
1991年 医学博士(大阪大学)授与
1995年 兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業 現在に至る
日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス在宅ケア研究会理事、日本尊厳死協会副理事長、日本在宅療養支援診療所連絡会理事、関西国際大学客員教授、東京医科大学客員教授(高齢総合医学講座)

【医学博士】
日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医、指導医、日本在宅医学学会専門医、日本禁煙学会専門医、日本内科学会認定医、労働衛生コンサルタント
【著書】
『平穀死・10の条件』(ブックマン社)、
『抗がん剤・10のやめどき』(ブックマン社)、
『胃ろうといふ選択』(がんく人院信選択)、
『小学校』(セブン&アイ出版)、
『抗がん剤が効く人』(大病院信かない人)まで続刊すか!(主婦の友社)、
『30バーツ病院』(P.H.P研究所)、
『中山書店』第一巻「在宅医療のすべて」、第二巻「認知症医療」など多数。

タイの都会と 堅持できるか

て欲しい」という趣旨の議論がされ
ていたことを思い出した。こうした
庶民がかかる公立病院の建物は古
くて医療機器も古かつた。しかし彼
らは30バーツ医療をとても有難いも
のだと受け止めていて、そこで働く
医師達も高い誇りを持っているよう
に感じた。

帰国前に大都会バンコクに移動
して、タイ日本人会の皆様に認知
症についての講演をした。日本人会
には7000人の会員がいるという。
リタイア組、仕事組などさまざまだ
がみなさん若々しく、活き活きと生
活していた。懇親会では医療につい
ての話になつた。日本人は30バーツ
医療を受ける人はいない、とのこと。
「30バーツ病院に行つたら医学生の

実験台にされる」とか「ろくな治療
しかしてもらえない」と散々な評価
であった。「日本人はそれなりの民
間保険に入るの超豪華な病院で最
高の医療を受けられる」とのこと。
教師陣は充実していて士気が高かつ
て受けとめていた。

「医療ツーリズム」を体感して

講演後、バンコク市内にある超豪
華な民間病院を4つほど見学した。
いわゆる「医療ツーリズム」として
有名な病院群である。どこも一流ホ
テル以上の豪華な設備を誇り日本人
専用カウンターがあり日本人医師も
いた。しかしそこで見かけたお客様
は、アラブ人や中国人ばかりで日
本人は少なかつた。たしかに美容整
形やアンチエイジング医療など至れ
り尽くせり感に溢れ、スタッフ達も
颯爽と立ち振る舞つていた。

タイには30バーツ医療といっ
て医師として働くことになればいつ
たいどちらを選ぶだろうか、とふと
考へてしまつた。また、現在の日本
のほころびだらけとはいえ堅持され
ている国民皆保険制度とタイのよ
うな最低限医療と自由診療の混在のど
ちらがいいのだろうか、と色々と
噂されている「医療ツーリズム」を
体感しながら、複雑な想いに耽つて
しまつた。

結論から申し上げると、日本には
タイのような豪華ホテル仕様病院は
無いが、それはそれでいいではない
か。やはり現在の国民皆保険制度を
死守した方が日本国民は幸せだと思
い至つた。そのためには高齢者の多
剤投与や残薬問題に象徴される無駄
な医療費の削減は不可避であること
も確信した。

田舎の医療を見学 国民皆保険制度

医学博士 長尾 和宏

コンケン県の片田舎の人口200
人のある村に2日間滞在。町の中心
にあるお寺の何人かのお坊さんと村
人たちには涙が出る位の歓待をして
頂いた。タイの僧侶には日本と違
い妻帯や飲酒の禁止をはじめ200もの
厳しい戒律があるという。村の中
でも別格であるが村人たちは僧侶た
ちを心から尊敬しているように感じ
た。一番驚いたのは托鉢後の朝食に
続いて昼食は正午までに終了しなけ
ればならず、その後は翌朝まで食べ
ることができないことだ。つまり20
時間くらいの断食を毎日しているこ
とになる。日々、空腹になりケトン
体を脳のエネルギー源にする時間帯
を持つているタイの僧侶たちは眞面
に感じた。

このこと。コンケン大学病院の医師に
聞くと「脳が壊れる」という意味の
タイ語はあるが市民は、一昔前の日
本のように親の物忘れを「老い」と
して受けとめていた。

村の小学校のハーフ園

その村の小学校も見学し歓迎昼食
会までやつてもらつた。全校生徒わ
ずか数十人の小さな学校であつたが、
教師陣は充実していて士気が高かつ
て受けとめていた。

30バーツ医療

タイには「30バーツ医療」という
医療がある。数は限られているが指
定された公立病院で、1回30バーツ
(日本円で約100円)でインスリ
ンなど必要な医療が受けられる。公
務員の地位は高くその家族も含めて
医療費はゼロのことだった。日本
でも生活保護者の医療費はゼロであ
る。4年前、参議院の予算委員会で
「生活保護者も1回100円でもい
いから窓口で払いコスト意識を持つ
た。子供たちに「将来何になりたい
か」と質問してみた。多かつた答え
の男の子は軍人で女の子は教師と看
護師さんだった。満丸で澄んだ目を
見て医療している数人の村人たちを訪
問した。日本で言えば在宅患者さん
の訪問診療であろうが、あくまでお
坊さんと一緒に慰問だ。タイも日本
と同様、糖尿病と高血圧の人が多い。
片足を切断した人や脳卒中で半身不
随の人もおられたが、みなさんイン
スリンを打つていた。

実は「タイには認知症の人はいな
い」と聞いて行つたのが今回の旅の
目的だったが、村には認知症らしき
高齢者がいた。しかしたしかに認知
症という言葉は村人の中で使われ
ていなかつた。歳をとれば当たり前
のこと。コンケン大学病院の医師に
聞くと「脳が壊れる」という意味の
タイ語はあるが市民は、一昔前の日
本のように親の物忘れを「老い」と
して受けとめていた。

アセアンに関する教育も熱心に行わ
れていた。また校舎の裏には、ハ
ブ園があり子供たちが様々なハーブ
を植えて薬効に関する教育も行われ
ていた。小学校世代からハーブを用
いたがんのセルフメディケーション、
つまり統合医療の関する教育が実習
という形で行われていて感心
した。